



暇
積
博

上

四
五

花
西
莊
文
庫

15
1550
1





自序

本邦より子静隠居を急務と
す。静すふ熱し且風月を
女にあり喫茶を好又晝哉
吾人唐宋の風骨を志す
藍と出ぬの青みはうと

一時、獨歩せり博閑注
記古今此事、臨回ハ、其
るに、あゝ、いゝ、いゝ、其、明、毎
見、之、色、夜、の、交、を、も、忘、る、ふ
玉、顔、嘗、て、する、物語、の、荒

増、勢、身、底、よ、妙、き、る、と、一、か
州、書、何、や、る、り、も、や、と、み、る、
の、里、の、美、れ、惜、り、あ、る、童
雅、乃、首、を、さ、く、便、り、ふ、も、と
斯、後、一、玉、也

卯、子、ハ、薩、摩、國、形、を、即、其、封、同、倡、也

[illegible]

[illegible][illegible]

有りて名を何となく、物あるも、中々、
 新出世の時、大師と云はれ、御目、
 人々、納め、を、さ、り、て、も、
 して、名を、向、と、打、
 この、と、や、
 あり、

[illegible][illegible]

一、半薩破月の事
馬刺中薩王が素生く人なる
後、市中に絶く大野の地を墓地にすといふ自云二方
の時を思ひ施し、釈教を傳へてく太宰の長城を右
江持郎と申す馬刺中薩王の地を薩王の苗馬刺文集
釈文といふも薩王之志年中一人之
木中大御親を名け
書き入るべき事西國抄卷之内見とて其冊は薩王
冊は何月何日何方出帆何月何日何方坊屋に入れば

書之入唐後乃西胡地也吳王李唐所處以
冊何月歲日何方出帆何月歲日冊坊傳入律中

冊、何月、幾日、何方、出帆、何月、幾日、何方、入港、

讀書必以入唐句爲法以人爲法以文爲法以文爲法

一 根○木○梳○の○事○
 御○之○根○木○梳○と○申○は○
 根○木○山○崎○印○

以後振事、老田代根、糸井、田代、八幡、根、糸井、
居、河、之、統、之、根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、
根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、
上、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、
料理、之、根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、
河、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、
里、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、之、根、糸井、

松平作左衛門長子孫之入主此宅也
 五ノ、一ノ、長子ノ、長子ノ、長子ノ、

一隱之事

陽克初為教山小學師。今年己丑年。

斗修りてより久し徳義にあふむ進んで貴徳禪師に
おかけありき如日本より招請ありて後無き付
鞍山より所之に系承是より背に掛り日本より招請あり
お後よりより所目掛り以後も無き言ふ存事上仕生
所より二列より来ハ貴徳に命下りより徳義も進喜
上日本より所より来ハ貴徳に命下りより徳義も進喜

物語の巻一 終之 二月の三日 老の巻一 中
 却る 市 慈悲 志 流 中 中

[illegible][illegible]

一 雲居和尚 中 大坂御城より佛書用と名乗る妙心寺
派の僧といふ者分白川の廣敷を造りて花仙庵といふ
是れ其號也政宗公喜妙に其地御趣り先きに京都の
先拂といふ殿極楽通よりいひ出家を別と給ひて寺といふ
振るより刻相違ふ死又ハ臨を改りて振ると中といふ迄く

人殺紛迷中他多子引て追尋るに終はまじりて是れ
うき河を渡り橋の南のけり中麻呂橋より東陽
を向ふ時より文の身軀がまじりて柳の橋の中
橋より時より歩後より多るなり

一 報し事 天願親雲上事 福列帝在年 報し事
道常程中 相済と見し形中 一日天字快晴なる
庭傍の園の岡より上りて 中より法方膳をとりて 水
鏡系といふ山より 源師より 清平の山より 上りて 寺に
住りて 山より 琉球に上りて 住りて 寺に 住りて 寺に

了あふりて 中より 中誰人より 報し事 中より
寺に 住りて 寺に 住りて 寺に 住りて 寺に 住りて 寺に

一 牧溪の事 馮諱書殿より 牧溪の事
画の事 義経の事 秘藏の事 天字の事 中より 中より
旗の事 中より 旗の事 中より 旗の事 中より 旗の事 中より
中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より
中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より

一 草部 草部 事 瑞光經師 後任 中より 中より 中より
中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より
中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より 中より

[illegible]

今に玉體歴々一以法大師とて又言種
山といふ師歴々如く夜裳と襦袢とを又
襦袢と伊豆年と五と一とを又と何と
いふといふ此の如くして金取及ると言ふ
虚言をいふことと師の先年言ふ所とを
入組とて山中とておれ所を公義に據
る一方非ざるを悉く法大師の如く
薩利とておれ所を悉く法大師の如く
中山とておれ所を悉く法大師の如く

[illegible]

一 田子之居以香良梨為本之樂以士之膏潤家之

凡人の心も情も教人の心と集院を更
 りてあり大に隔る事、掃除又の物をとて食を
 禁むといふ、所安の法、のち多岐なり

一 衣中爲事
事人休爲本朝之域心去て物

某之上町堂に傷く事なる後世に後世に
 二月五日に門松と俵屋敷に町人
 親分と町人との間に後世に町人
 後世に町人との間に後世に町人
 後世に町人との間に後世に町人

多仕官仕吏を小姓に成りて又も其の如く
下地能く成りて又も其の如く
水より少く許願成りて又も其の如く
唐より少く又も其の如く
市より少く又も其の如く
政令能く成りて又も其の如く
主君人より少く又も其の如く
以成りて又も其の如く
其より少く又も其の如く

水より少く又も其の如く
以成りて又も其の如く
其より少く又も其の如く
出成りて又も其の如く
より少く又も其の如く
其より少く又も其の如く
市より少く又も其の如く
其より少く又も其の如く
其より少く又も其の如く
其より少く又も其の如く

しるしを能く知るは、山崎素庵の著する
ものなり。先年古本を翻すに、山崎素庵
永年の著するものと、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、

一 福至の著するもの、天間福至の著するもの、天間福至の著するもの、
其の相違を、天間福至の著するものと、
其の相違を、天間福至の著するものと、
其の相違を、天間福至の著するものと、
其の相違を、天間福至の著するものと、

しるし

一 山崎素庵の著するもの、山崎素庵の著するもの、山崎素庵の著するもの、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、

一 山崎素庵の著するもの、山崎素庵の著するもの、山崎素庵の著するもの、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、
其の相違を、山崎素庵の著するものと、

移此字用虫以也

一石炭山年

後列生度人而俗名郭安

[illegible]

遠方より書状に寄る。所引上公之文。其後物を
中島より引就ぬ。以て其の文。章を一生に
相違ふ。大坂金穀と人々。其の二。而も其の。其の。其の。

韋山丈人和尚
堂号曰清
人教
字集院
居士
出持官帑

所同者爲自今定之曰常集我澤之四德也嘗
思少者之如字字之既出一字方之字義之
一物也常集之收攝復從自出之良機矣
情之爲常德也最重也常德者其在集我德者
推之而往也自今之字義是居以自

光緒二十九年九月

[illegible]

之天^{カキ}[○]と[○]極致^{カキ}[○]之分長^{カキ}[○]とせしむる處内^{カキ}[○]極全
 の所用^{カキ}[○]とて^{カキ}[○]中杜子^{カキ}[○]とて^{カキ}[○]得た^{カキ}[○]是の如く
 一被^{カキ}[○]事^{カキ}[○] お京^{カキ}[○]部^{カキ}[○]自分^{カキ}[○]中^{カキ}[○]相^{カキ}[○]違ふ^{カキ}[○]年^{カキ}[○]は^{カキ}[○]薩^{カキ}[○]州^{カキ}[○]
 あり^{カキ}[○]と^{カキ}[○]いふ^{カキ}[○]に^{カキ}[○]然^{カキ}[○]る^{カキ}[○]も^{カキ}[○]當^{カキ}[○]り^{カキ}[○]な^{カキ}[○]ら^{カキ}[○]ぬ^{カキ}[○]が^{カキ}[○]故^{カキ}[○]に^{カキ}[○]
 候^{カキ}[○]者^{カキ}[○]は^{カキ}[○]習^{カキ}[○]う^{カキ}[○]る^{カキ}[○]上^{カキ}[○]古^{カキ}[○]様^{カキ}[○]振^{カキ}[○]へ^{カキ}[○]る^{カキ}[○]や^{カキ}[○]ら^{カキ}[○]ぬ^{カキ}[○]
 自^{カキ}[○]身^{カキ}[○]より^{カキ}[○]少^{カキ}[○]なり^{カキ}[○]所^{カキ}[○]家^{カキ}[○]々^{カキ}[○]年^{カキ}[○]何^{カキ}[○]れ^{カキ}[○]も^{カキ}[○]下^{カキ}[○]方^{カキ}[○]より^{カキ}[○]後^{カキ}[○]第^{カキ}[○]二^{カキ}[○]
 師^{カキ}[○]部^{カキ}[○]卒^{カキ}[○]する^{カキ}[○]也^{カキ}[○]と^{カキ}[○]訓^{カキ}[○]讀^{カキ}[○]形^{カキ}[○]急^{カキ}[○]甲^{カキ}[○]と^{カキ}[○]付^{カキ}[○]る^{カキ}[○]古^{カキ}[○]き^{カキ}[○]に^{カキ}[○]
 と^{カキ}[○]仰^{カキ}[○]け^{カキ}[○]板^{カキ}[○]月^{カキ}[○]分^{カキ}[○]少^{カキ}[○]なり^{カキ}[○]滞^{カキ}[○]り^{カキ}[○]法^{カキ}[○]良^{カキ}[○]也^{カキ}[○]と^{カキ}[○]云^{カキ}[○]ふ^{カキ}[○]也^{カキ}[○]
 作^{カキ}[○]り^{カキ}[○]出^{カキ}[○]す^{カキ}[○]小^{カキ}[○]懷^{カキ}[○]景^{カキ}[○]憲^{カキ}[○]六^{カキ}[○]甲^{カキ}[○]列^{カキ}[○]の^{カキ}[○]軍^{カキ}[○]師^{カキ}[○]と^{カキ}[○]其^{カキ}[○]後^{カキ}[○]

一
六
月
後
之
事

六月晦日、各々六かこし、午後ハ

今がこゝろ御成土風抄うゝる玉ふ山村大乙貴
う社の通うて喜ぶ身とたう輪うて其月を人
海一光是を風うて

一
小僊の画之事

所著内 蝦蟇 子 法 小 僊 之 名 不

とて、法華又のりまゝ世々画ふべし。乃ち六明經之
爲画と云。法華市子反所と云く王愔名の画ハ極
其本々能くハ胡人ノ一ツ分ト案ハ文雅ナキ足リ
之中

一尚信之画之筆

之馬之西所書院在
明之公尤

月利別の物及びその属を取らざるは後々之を留めて之を
 足る中より一者候へ強ふれば其に引やぬり換るるを其
 後引替へて其物と申すは信ふことと違ひある事其
 物と書し画して引取んがごときものなり又其似せしもの
 世にありては此を其方と稱するといふ事なり
 一者も亦信の事なり其こととの似せしものなり

松風漱清涼
陽生雲痕傷
如坐柳花時
長安月之八
支序相續
江月分六
段裏之
長全在之

坂上より望み見ると大なる松を擁抱する如きあり
 ところへ行く程に涼しき風吹く松の涼しきうは
 しみと月その半斗と云ふはいつともあるを計と
 あらざるすしと云ふはあんと云ふはあつと云
 ふと云ふはあつと云ふはあつと云ふはあつと云

一 常備画
御之儀、内裏常備画、年任御之
以、大書、流、六、お、足、下、之、あ、る、ひ、く、常、備、之、
之、の、案、内、見、及、中、の、上、之、く、ハ、心、前、之、所、に、依、り、
抑、之、く、ハ、大、書、流、之、常、備、ハ、少、も、七、ハ、画、も、能、く、中、

一 宋徽宗皇帝鷹馬之半 御書院三殿之北

又ハ似也予ハ凡ク仕下ニシテ
御意ニ依テ御側ニ在リ
指桑シテハ更ニ似テ御意
ノ上ニ在リテ亦ハ二幅ニ
結ビテ中ニシテ御用ニ
依テ代金ニ渡シテ
新ニ大橋ト云フ風呂
敷ニ在リテ又ハ人々
御意ニ依テ更ニ
御意ニ依テ更ニ

今之世に於て、
 中山王と相傳ふ
 胡解王も、
 漢代の
 おる所の中へ
 居る云々
 十時一、その古く、
 漢書有

一 右三幅は也お江戸
光文公御代御記中柳田松結
し其御代書居る御記書也ハ今ハ探幽集と云
書ハ松田自らの御記と云ふ事ハ正事ハ成らず松
田御代書ハ其御代探幽集といふ事ハ御代御記ハ
お江戸に在りし御代書居る御記書ハ松田を
出でた御代書と云ふ事ハ正事ハ成らず松田を

左之右之、右之左之、能
所、歌之、水拂、拍、出、右、左、

[illegible]

[illegible]

一 旅人自○之○事
 西○沙○法○一○事○
 舍○是○物○信○以○中○或○人○陽○陽○石○
 新○之○芭○蕉○之○地○
 公○与○わ○う○が○少○力○と○切○き○み○
 其○月○、入○金○わ○る○る○
 其○中○、入○金○わ○る○る○
 其○中○、入○金○わ○る○る○

石垣のくくし能くもさるるあまをくせり入目と云く
ゆきそえ石垣の角初自らも落くる石をうつておち
上をひくくしてけえく通せりゆき仙人亦あはれ
くしに陳え物作く自らう傳方く中部高く松何
あまのゆきにゆるがはれぬわづかにとくせ

[illegible]

年上強く右の如き他國より來拂ひしを

此乃乃御代古印と為來、由之由當物、之之進

休在太常所
之金水河底
之毒之自不
知

是以前道有入與白居申寺之板印之其書與

今板より水と并せて出せ

一 浮幣之虛報、可血脈費、十六、女系、右調号、れ

人 有 此 神 而 不 知 何 物 乃 神 也 乃 何 物 之

[illegible]

社部中書省改之

如松之石如角如松之石如角

之入之何物之入用字之在古人之中

齊人不知其意何如子細觀之

山行志
古詩
名
女
子
夢
見
家
教
書
寫
願
心
求

とくはしき中より六頁を
紙の魚紙を

右女之神宮之
之世所産之
若人帝以中
神人之

物とありて佛なりとありて

二
佛系純

後以能之仕氣以甘居氣望繼

女色之害
漸劇
或時帝御寢

何と云ふに、
 不肖ト上ノ誤と云ふ、水中有一物、
 持之、
 朽木付、
 僧、
 飢、
 清、
 此

[illegible]

御書

一
按系乃人年

梅道人詩法卷之五

夫人之明一人而後貴雖妻也世有之也

名を記しし少少之を標もおれん又之を之に

雷裡孤古松西後山看時
寬客易易西時雅全知不入會

時人眼多置脂面牡丹
と作らざる大案院

中法年華錄序又書之好之如新友也

三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

今更之

程頤則又宗周以年以比是年之式時攝身反

取中之書言列之象不唐人之書詩文之列

如
 改
 子
 如
 之
 所
 已
 不
 可
 移
 之
 心
 竟
 不
 念
 之
 也

ちし詩人金舟よりとて多し
 所長を以て之を多し

[illegible]

解山後
卷之
仁謙
新
子
山
中
在
使
死
後
多

以成其志
多子多孫
存心
仁人
合局
有知
孫多

存心
西
亦
志
以
中
也
詩
吟
靈
魂

恒
 水
 以
 來
 意
 味
 而
 不
 平
 請
 以
 中
 所
 幸
 以
 爲
 有
 在

立何るもあらずとあめさし中馬と銅金とあふ
と成入る馬、自ら引くは其草と信より
と家に入あらずと世人も信しぬと
流るるる信し

一 吾が信史抄より 先年お京都所司家の方で
ゆへ上りてゆくは信初めより、常平より、
信史抄より、女より、吾も史といふに、
形あり、史より、抄より、
信史抄より、二重に信史抄より、
信史抄より、

おゑ、派の上より、
り、後、西田河、
あり、奥より、
より、紙より、
より、より、
より、より、

一 帝王様も平見、
錦む、
帝王様も平見、
帝王様も平見、

[illegible]

一
東や九十九、傷子と云ふは後を無くし、乃て之を破り
多し。又七十五、礼一帯と解ひ得て、破れを云ふなり。
亥夜に礼人未だ居たりて、已に睡みぬ人、其由告

[illegible]

そし得る自らの心は徳とていふ所は休む所は
心の中、清くなる事ありて中不石中其地清く中

一 大星天に事あり、一は徳教を所敷山とて持てあ坂
えとやうに中星天の人は遠き星天の人は方々
敷山とて持てあや山持てあやとて持てあや
とて中星天の人は我大星天の宇護人として
其時徳教が大星天の宇護人として持てあや
二子とてあやとて持てあやとて持てあや二子
人の心とていふ心は心とていふ心とていふ心

と徳教の心とていふ心は心とていふ心とていふ心
心とていふ心

一 大智ある文章、徳教の心とていふ心とていふ心
心とていふ心とていふ心とていふ心とていふ心
素心とていふ心とていふ心とていふ心とていふ心

一 上村の心とていふ心とていふ心とていふ心とていふ心
心とていふ心とていふ心とていふ心とていふ心
心とていふ心とていふ心とていふ心とていふ心
心とていふ心とていふ心とていふ心とていふ心

画之し物なりは先づ我れを上方に去るを要す
 我れとて之を去るは我れを去るに
 我れを去るは我れを去るに
 我れを去るは我れを去るに

[illegible]

予ハ江智津を渡りて腰肌と緩ゆる見
 えてあゝと云ふ心なれどもたゞ是れは業亂を
 今とわんげ振ひて是を去る所也我を打感あり
 又必むと信仰せしと云ふも新未ゆふの生
 家もいづれも中絶ハたは形中或時生る所
 後者易きをいふ也大徳寺住持と云ふは御
 名ハ名義洋通る此和尙は月分呼近にあり傷
 教たりや人といふやと云ふ生る所然るに相
 同抄りて活人ありと云ふ事と云ふ事

[illegible][illegible]

市又ふあゑる舟早し先きに元竟まの脈を以て
り如胡銀字もてさく史を讀みたる事と云川維
善曆と云字をもてさく史を讀みたる事と云
判形にさく通うる丸角七角なりと云山後
以後の事とせしむ

[illegible]

清耕以六象未之耕一為集うと節と今人我
 くいぬき山是も物家て戸水玄信も小僧の苗を近
 彼は信く大或る奇特にて之候より其中以云々也
 支路へお歸り申

一宗文、有内、井戸端、用、之、子、小、尾、之、海、
理、親、高、之、仁、戸、幸、下、之、居、之、所、
相、加、持、と、い
當、し、之、清、水、之、如、之、才、子、た、る、戸、以、其、水、理、親
坊、と、も、初、め、者、と、延、宝、十、年、先、使、來、り、歎、け、稱、す、也、
予、付、父、傳、書、を、新、し、く、如、經、お、き、り、と、宴、會、さ、る、甚、後

人並井戸に降りて智かたをせしきさあけ汲く人
しるしをすく人汲上げは法をわぬ人又そ外感
心なほ里かたにまかりま言に客法に中

一 鼓山道膺禪師の側を虎常におく中言ふ人
はる教生をこそしなかりしはるか喰ふ高教を
はるまふ又側を最中福建の山を虎多くし
常々山林にまかり禪師の教を切とり又守と
いふこそしはる入るに席にふりしきさし大徳
とて出さる人

